

## 2. 果樹類

### (1) りんご

薬剤名	使用目的	使用方法	使用時期	本剤の使用回数 (有効成分を含む剤の 総使用回数)	備考
エコーキー	摘花	立木全面散布	満開日追加散布を要する場合は2～3日後に1回	2回以内(ギ酸カルシウム2回以内)	
ストップール液剤	収穫前落果防止	立木全面散布	収穫開始予定日の25～7日前(但し、2回散布の場合は10日程度間隔をあける)	2回以内(ジクロロプロップ2回以内)	
ビーエー液剤 プレリユード液剤	側芽発生促進	新たに伸長した新梢部に散布	新梢伸長時	10回以内(ベンジルアミノプリン10回以内(但し、立木全面散布は1回以内))	りんご(苗木)
		立木全面散布	新梢伸長時	1回(ベンジルアミノプリン10回以内(但し、立木全面散布は1回以内))	りんご(苗木)
	高接1年枝側芽発生促進	立木全面散布	伸長旺盛期(6月上旬以降)	1回(ベンジルアミノプリン1回)	
ヒオモン水溶剤	収穫前落果防止	立木全面散布	収穫開始予定日の21～4日前	2回以内(1-ナフテン酢酸3回以内)	
ミクロデナボン水和剤 85	摘果	散布	満開後1～4週間	2回以内(NAC2回以内)	
石灰硫黄合剤	摘花	立木全面散布	満開後	2回(石灰硫黄合剤 ー)	

注1) 使用回数の欄の記載は、収穫物への残留回避のため当該剤及びそれぞれの有効成分を含む農薬の総使用回数の制限を示す。

注2) 農薬登録上の作物名が標記の作物名と異なる場合、備考欄に記載した。

使用目的	対象果樹	使用薬剤	使用 方 法	使 用 上 の 留 意 点
摘 花	りんご	エコーキー (ギ酸カルシウム 98.0%)	1. 100～150 倍液を満開日に散布する。 えき芽花の多い場合は1回目散布の2～3日後に追加散布する。	1. 散布時期は、前日頂芽側花が50%程度開花し、当日満開に達すると思われる日を目標とする。処理時期が早いと過剰摘花となる恐れがあり、遅いと高い摘花効果は得られない。 2. 極端な高温、乾燥時や樹勢が特に弱い樹では、葉縁の葉害が大きくなる場合があるので散布をしない。
		石灰硫黄合剤 (全硫化態硫黄 22.0%)	1. 満開後に、100～120 倍液を2回散布。	1. 満開以前は、過剰落花となるので散布しない。 2. 著しい低温・高温の時は散布しない。 3. 「さんさ」は過剰落花の恐れがあるので使用しない。 4. 散布間隔は、3～4日を標準とする。
摘 果	りんご (紅玉(成木))	マイクロデナポン水和剤85 (NAC 85.0%)	1. 1,200 倍液で用いる。 2. 展着剤を必ず使用する。 3. 目通りの中心果横径の大半が18～20 mmの範囲にある時期が散布期である。	1. 果実及び果そう葉によく付着するよう散布する。 2. 散布後25日頃から仕上げ摘果に入る。ただし、落果する果実としない果実は、散布後2週間頃には判断できるので、経験を積むことにより仕上げ摘果を早めることができる。 3. マイクロデナポン水和剤85は、デリシャス系品種や「秋映」に使用すると過剰摘果になるので使用しない。
	りんご (ふじ(成木))	マイクロデナポン水和剤85 (NAC 85.0%)	1. 1,200 倍液で用いる。 2. 展着剤ニーズ1,000倍かアプローチBI 333倍を加用する。 3. 目通り頂芽の中心果横径が10～12 mmの時が散布適期である(満開後2～3週間頃)。	
	りんご (千秋(成木))	マイクロデナポン水和剤85 (NAC 85.0%)	1. 満開2～3週間後頃に1,200 倍液を散布する。 2. 展着剤を使用する。	
	りんご (シナノスイート・シナノゴールド(成木))	マイクロデナポン水和剤85 (NAC 85.0%)	1. 1,200 倍液で用いる。 2. 展着剤アプローチBI 333倍を加用する。 3. 満開2～3週間後頃に散布する。	

使用目的	対象果樹	使用薬剤	使用 方 法	使 用 上 の 留 意 点
収穫前落果防止	りんご (つがる、 デリシヤス系、紅玉)	ストッポール液剤 (ジクワロップ 4.5%)	1. 収穫開始予定日の25日前に1,000～1,500倍液を1回散布するか、収穫開始予定日の25日前と15日前の2回散布する。 2. 展着剤は使用しない。	1. 標準的な10a当り散布量は、動噴使用で400ℓ、SS使用で500ℓ程度である。果実及び果そう葉を中心に全体にかかるようにていねいに散布する。 2. 使用時期、使用回数、濃度を守る。使用時期が早すぎると果実肥大が劣り、遅すぎると落果防止の効果が劣る。 3. 単用散布とする。 4. 成熟が若干促進されるがあるので、常に熟度の進み具合を調べ、収穫日に注意する。 5. 乾燥が続くと効果が低減するので、定期的な乾燥防止に努める。 6. 「シナノゴールド」、「シナノドルチェ」では、落果の少ない樹に散布する必要はない。マルバカイドウ台木樹は、わい性台木樹に比べ落果が少ない傾向である。 7. 「シナノゴールド」を冷蔵で長期貯蔵する場合は、品質が低下するので散布しないことが望ましい。 8. 他作物にかかると薬害が発生しやすいので、飛散しないよう注意する。
	りんご (秋映、シナノゴールド)		1. 収穫開始予定日の25日前に1,000～1,500倍液を1回散布する。 2. 展着剤は使用しない。	
	りんご (シナノドルチェ)		1. 収穫開始予定日の15日前に1,500倍液を1回散布する。 2. 展着剤は使用しない。	
	りんご (つがる)	ヒオモン水溶剤 (1-ナフタレン酢酸ナトリウム 4.4%)	1. 1,000倍液を収穫開始予定の21～7日前に1回散布する。 2. 2,000倍液の場合は2回以内の散布とし、収穫開始予定日の21～14日前に1回目を散布し、葉効を確認してから必要に応じてその7～10日後に2回目を散布する。 3. 展着剤を使用する。	
高接ぎ1年枝の側芽発生促進	りんご	ビーエー液剤 (ベンジルアミノリン 3.0%) または、 プレリユード液剤 (ベンジルアミノリン 3.0%)	1. 「ふじ」は100倍液を、「つがる」は50倍液を6月上旬～7月中旬に散布する。	1. 伸長中の新梢全体にかかるように散布する。 2. 7月中旬以降に散布すると効果が劣る。また、散布期が早過ぎると、望ましい位置に側芽が発生しにくい。 3. 散布前に摘心を加えるとさらに多く側芽が発生する。

使用目的	対象果樹	使用薬剤	使用 方 法	使 用 上 の 留 意 点
側芽発生 促進	りんご	ビーエー液剤 (ベンゾルミア リン 3.0%) または、 プレリユード 液剤 (ベンゾルミア リン 3.0%)	1. 「ふじ」、「シナノド ルチェ」、「シナノピ ッコロ」等は100 倍液を、「シナノス イト」は75 倍液 を、「つがる」、「秋 映」、「シナノゴール ド」、「シナノプッ チ」は50 倍液を、 新梢伸長時に散布 する（展着剤は不 要）。	1. 2年生フェザー苗（カットツリ ー）を養成する際には、1本に整 理した新梢が20cm程度伸長した 頃に1回目の散布をする。以後、 概ね10日から2週間程度の間隔 で、新たに伸長した新梢先端から 15cm程度までの部分に散布する。 品種により新梢伸長の様子が異 なるため、1回目の散布タイミン グおよびその後の散布間隔に違 いが出る。散布回数は合計10回 までとする。 2. ビーエー液剤は葉先から少し葉 液がしたたる程度に散布する。2 回目以降の散布では小型のハン ドスプレーを用いた場合、1回の 散布で使用する薬液の量（濃度調 整済み）は、およそ3～4 ml程 度である。新梢の横方向だけでな く、真上方向からも散布し、先端 部分の小さな葉にも薬液がよく 付着するように散布する。 3. ビーエー液剤の散布後6時間以 内の強い降雨は、薬剤の効果を有 意に低減させるので、散布後なる べく降雨の予想されないタイミ ングで処理するのがよい。

(2) なし

薬剤名	使用目的	使用方法	使用時期	本剤の使用回数 (有効成分を含む剤の 総使用回数)	備考
CX-10	休眠打破による発芽促進及び発芽率の向上	立木全面散布	収穫・落葉後～発芽前	1回(シアナト <sup>®</sup> 1回)	
エスレル10	熟期促進	立木全面散布	果実の横径が30～35mmの時期(満開後60～70日頃)(但し、収穫14日前まで)	1回(エテホン1回)	なし(二十世紀)
			果実の横径が60mm以上の時期(満開後100日頃)(但し、収穫14日前まで)		
ジベレリンペースト	熟期促進	果梗部塗布	満開30～40日後	1回(ジベレリン2回以内(但し、果梗部塗布は1回以内、新梢基部塗布は1回以内))	日本なし
	新梢伸長促進	新梢基部塗布	満開予定10日前～満開40日後		
		頂芽基部塗布または新梢基部塗布	萌芽期～新梢伸長期	3回以内(ジベレリン3回以内)	日本なし(苗木)
ストップール液剤	収穫前落果防止	立木全面散布	収穫開始予定日の14～7日前	1回(ジクロルプロップ <sup>®</sup> 1回)	なし(青なし)

注1) 使用回数の欄の記載は、収穫物への残留回避のため当該剤及びそれぞれの有効成分を含む農薬の総使用回数の制限を示す。

注2) 農薬登録上の作物名が標記の作物名と異なる場合、備考欄に記載した。

使用目的	対象果樹	使用薬剤	使用方法	使用上の留意点
熟期促進	日本なし	ジベレリンペースト (ジベレリン 2.7%)	1. 満開後30日から40日の間に、1果当たり20mgを果梗に塗布する。	1. 果梗処理時期を厳守する。 2. 処理部分は果梗の上部で長さ1cm前後とする。 3. 塗布量が多いと果面に溶けて流れ、サビが出るので注意する。 4. 果梗の片面塗布は果形の乱れを生ずるので、全面塗布を厳守する。 5. 標準栽培管理下で用いる。 6. 熟期が早まるため、防鳥、防蛾対策を早めに行う。 7. ゆず肌発生樹には使用しない。 8. 異常天候(異常高温、異常低温)時には使用しない。

使用目的	対象果樹	使用薬剤	使用 方法	使用 上の 留意 点
新梢伸長 促進	日本なし	ジベレリン ペースト (ジベレリン 2.7%)	1. 満開予定日 10 日 前から満開 40 日後 に、新梢基部に1 枝当たり100mgを1 回塗布する。	1.処理枝の花芽は、摘蕾・摘花で除去 し、伸ばす新梢基部に塗布する。 2.塗布する際に、薬剤が葉や芽に付 着すると薬害(やけ症状)の原因とな るので、葉や芽に付着しないよう に注意して塗布する。
新梢伸長 促進	日本なし (苗木)	ジベレリン ペースト (ジベレリン 2.7%)	1. 萌芽～新梢伸長期 に、新梢の基部ま たは頂芽基部に1 枝当たり 100mg を 塗布する。処理回 数は、3回以内とす る。	1.苗木の花芽は、摘蕾・摘花で除去 し、伸ばす新梢基部に塗布する。 2.塗布する際に、薬剤が葉や芽に付 着すると薬害(やけ症状)の原因とな るので、葉や芽に付着しないよう に注意して塗布する。
熟期促進	日本なし (二十世 紀)	エスレル10 液剤 (エテホン 10.0%)	以下の使用方法のい ずれか1回とする。 1. 早期低濃度処理方 法 果実横径が 30～35 mmに達した時(満開 60 日後、6月中下旬 頃(但し、収穫 14 日 前まで))に 4,000 倍 液(25ppm)を 10a 当 り 200～250ℓ、1回 散布する。 2. 後期高濃度処理方 法 満開後 100 日経過 し、かつ果実の横径 が 60 mm以上になっ た時(但し、収穫 14 日前まで)に 1,000 ～2,000 倍液(50～ 100ppm)を 10a 当り 200ℓ、1回散布す る。 3. 展着剤は加用しな い。	1.「二十世紀」以外の品種には使用し ない。 2.散布時期が早すぎると裂果や落果 などの薬害を生ずるので定められた 散布時期を厳守する。 3.散布用水及び水槽はアルカリで汚 染されていないものを使用する。 4.単用散布とし、アルカリ農薬(ボルド ー液など)との近接散布(7～10 日) は避け、薬剤は調整後1日以上おか ない。 5.重複散布は裂果の発生、過熟果が 発生するのでさける。 6.衰弱樹及びゆず肌発生樹への散布 は熟度の進行を極端に早めるので 行わない。 7.散布時期は定められた時期を厳守 する。 8.有袋栽培の場合は熟度の進行を十 分観察して収穫する。 9.一般的には早期低濃度散布法を用 いるが、気象の変化で熟期が遅れる と思われる場合は後期高濃度散布 を行い、散布法の重複は避ける。
収穫前落 果防止	日本なし (青なし)	ストップール 液剤 (ジクロロプロップ 4.5%)	1. 散布濃度は 1,500 ～2,000 倍とする。 2. 収穫開始予定日の 14～7日前に 10a 当り 200～300ℓ を 1回散布する。 3. 展着剤は加用しな い。	1.使用時期、使用回数、濃度を守る。 2.単用散布する。 3.散布後に降雨があっても再散布しな い。 4.成熟が若干促進されることがあるの で、常に熟度の進み具合を調べ収 穫日に注意する。 5.他作物に薬害を発生しやすいので、 飛散しないよう特に注意する。
発芽促進 及び発芽 率の向上	日本なし 受粉樹 (松島)	C X - 1 0 (シアミト 10.0%)	1. 10 倍液の立木全面 散布。 2. 使用時期は、収穫・ 落葉後～発芽前。 3. 使用回数は 1 回。	1.12 月下旬から 1 月中旬に散布する。 2.重複散布や樹勢の弱い樹への散布 は、芽枯れや枝枯れが生じる恐れが あるため行わない。 3.目的外の樹や、他作物に飛散しな いように注意する。 4.散布者は使用前 24 時間以内の飲 酒をしない。

(3) ぶどう

薬剤名	使用目的	使用方法	使用時期	本剤の使用回数 (有効成分を含む剤の総 使用回数)	備考
CX-10	休眠打破による新梢の萌芽促進及び発芽率の向上	結果母枝に散布又は塗布	収穫後発芽前	1回(シアマト 2回以内)	
(ストレプトマイシン) アグレプト液剤 ストマイ液剤 20	無種子化	散布 花房浸漬 花房浸漬(第1回目ジベレリン処理と併用)	満開予定日14日前～開花始期 満開予定日14日前～開花始期 満開予定日14日前～満開期	1回(ストレプトマイシン 1回)	
エスレル10	落葉促進	立木全面散布	収穫後～剪定前	巨峰(露地栽培)は2回以内(但し、収穫後～剪定前は1回以内、新本葉展葉時は1回以内)、その他のぶどうは1回	
(ベンジルアミノプリン) ビーエー液剤 プレリユード液剤	無種子化処理の第1回ジベレリン処理時期の早期への拡大	ジベレリン処理の第1回処理液に添加して蕾(果房)を浸漬処理する。	満開予定日14～17日前	1回(ベンジルアミノプリン 1回)	ぶどう(テラウエア)露地栽培園
(ジベレリン) ジベレリン粉末	果粒肥大促進	果房浸漬	満開10～20日後	1回(但し、降雨等により再処理を行う場合は合計2回以内)(ジベレリン1回(但し、降雨等により再処理を行う場合は合計2回以内))	ぶどう(巨峰) [有核栽培]
	無種子化、果粒肥大促進	花房浸漬(ホルコルフエニロン 10ppm液に加用)	満開3～5日後(落花期)	1回(但し、降雨等により再処理を行う場合は合計2回以内)(ジベレリン3回以内(但し、降雨等により再処理を行う場合は合計5回以内))	ぶどう(サニール-ジューを除く巨峰系4倍体品種) [無核栽培]
	着粒安定、果粒肥大促進	第1回目:花房浸漬 第2回目:果房浸漬	満開時～満開3日後(第1回目)及び満開10～15日後(第2回目)	2回(但し、降雨等により再処理を行う場合は合計4回以内)(ジベレリン3回以内(但し、降雨等により再処理を行う場合は合計5回以内))	ぶどう(キングデラ、ハートレス、BKシードレスを除く3倍体品種)
	無種子化、果粒肥大促進	第1回目:花房浸漬 第2回目:果房浸漬	満開時～満開3日後(第1回目)及び満開10～15日後(第2回目)	2回(但し、降雨等により再処理を行う場合は合計4回以内)(ジベレリン3回以内(但し、降雨等により再処理を行う場合は合計5回以内))	ぶどう(サニール-ジューを除く巨峰系4倍体品種) [無核栽培] ぶどう(2倍体欧州系品種) [無核栽培]
(ジベレリン) ジベレリン粉末	無種子化、果粒肥大促進	第1回目:花房浸漬 第2回目:果房浸漬又は果房散布	満開予定日約14日前(第1回目)及び満開約10日後(第2回目)	2回(但し、降雨等により再処理を行う場合は合計4回以内)(ジベレリン2回(但し、降雨等により再処理を行う場合は合計4回以内))	ぶどう(テラウエア) [無核栽培]

薬剤名	使用目的	使用方法	使用時期	本剤の使用回数 (有効成分を含む剤の総 使用回数)	備考
ジベレリン錠剤	果粒肥大促進	果房浸漬	満開 10～20 日後	1 回(但し、降雨等により再処理を行う場合は合計 2 回以内)(ジベレリン 1 回(但し、降雨等により再処理を行う場合は合計 2 回以内))	ぶどう(巨峰) [有核栽培]
	無種子化、果粒肥大促進	花房浸漬 (ホルクロルフェニユロン 10ppm 液に加用)	満開 3～5 日後(落花期)	1 回(但し、降雨等により再処理を行う場合は合計 2 回以内)(ジベレリン 3 回以内(但し、降雨等により再処理を行う場合は合計 5 回以内))	ぶどう(サニール-ジュを除く巨峰系 4 倍体品種) [無核栽培]
	着粒安定、果粒肥大促進	第 1 回目:花房浸漬 第 2 回目:果房浸漬	満開時～満開 3 日後(第 1 回目)及び満開 10～15 日後(第 2 回目)	2 回(但し、降雨等により再処理を行う場合は合計 4 回以内)(ジベレリン 3 回以内(但し、降雨等により再処理を行う場合は合計 5 回以内))	ぶどう(キングデラ、ハニートレス、BK シードレスを除く 3 倍体品種)
	無種子化、果粒肥大促進	第 1 回目:花房浸漬 第 2 回目:果房浸漬	満開時～満開 3 日後(第 1 回目)及び満開 10～15 日後(第 2 回目)	2 回(但し、降雨等により再処理を行う場合は合計 4 回以内)(ジベレリン 3 回以内(但し、降雨等により再処理を行う場合は合計 5 回以内))	ぶどう(サニール-ジュを除く巨峰系 4 倍体品種) [無核栽培] ぶどう(2 倍体欧州系品種) [無核栽培]
	無種子化、果粒肥大促進	第 1 回目:花房浸漬 第 2 回目:果房浸漬又は果房散布	満開予定日約 14 日前(第 1 回目)及び満開約 10 日後(第 2 回目)	2 回(但し、降雨等により再処理を行う場合は合計 4 回以内)(ジベレリン 2 回(但し、降雨等により再処理を行う場合は合計 4 回以内))	ぶどう(テラウエア) [無核栽培]
フラスター液剤	着粒増加、新梢伸長抑制	散布	新梢展開葉 7～11 枚時(開花始期まで)	2 回以内(ビコートロクト 2 回以内)	ぶどう(巨峰(施設栽培)) ぶどう(巨峰(露地栽培)) ぶどう(巨峰系 4 倍体品種) [巨峰、ピオネを除く]
	新梢伸長抑制	散布	満開 10～20 日後(但し、収穫 60 日前まで)		ぶどう(ピオネ) ぶどう(ナガノパープル)
フルメット液剤	着粒安定	開花始め～満開前に使用する場合花房浸漬(ジベレリン 第 1 回目及び第 2 回目処理は慣行)	開花始め～満開前又は満開時～満開 3 日後	1 回(但し、降雨等により再処理を行う場合は合計 2 回以内)(ホルクロルフェニユロン 3 回以内(但し、降雨等により再処理を行う場合は合計 5 回以内))	ぶどう(サニール-ジュを除く巨峰系 4 倍体品種) [無核栽培] ぶどう(2 倍体欧州系品種) [無核栽培]



薬剤名	使用目的	使用方法	使用時期	本剤の使用回数 (有効成分を含む剤の総 使用回数)	備考
フルメット液剤		満開時～満開 3 日後に使用 する場合ジベレ リンに加用 花 房浸漬(ジベレ リン第 2 回目処理 は慣行)			ぶどう(サニ ールシェを除 く巨峰系 4 倍体品種) [無核栽培] ぶどう(2 倍 体欧州系品 種)[無核栽 培]
	果粒肥大促 進	果房浸漬	満開 15～20 日後	1 回(但し、降雨等により再 処理を行う場合は合計 2 回 以内)(ホルクロルフェニロン 1 回(但 し、降雨等により再処理を 行う場合は合計 2 回以内))	ぶどう(巨峰 系 4 倍体品 種)[有核栽 培]
	無種子化、果 粒肥大促進	ジベレリンに加用 花房浸漬	満開 3～5 日後(落花 期)	1 回(但し、降雨等により再 処理を行う場合は合計 2 回以 内)(ホルクロルフェニロン 3 回以内(但 し、降雨等により再処理を行 う場合は合計 5 回以内))	ぶどう(サニ ールシェを除 く巨峰系 4 倍体品 種)[無核 栽培]
	果粒肥大促 進	ジベレリンに加用 果房浸漬(ジベ レリン第 1 回目処 理は慣行)	満開約 10 日後	1 回(但し、降雨等により再 処理を行う場合は合計 2 回以 内)(ホルクロルフェニロン 2 回以内(但 し、降雨等により再処理を行 う場合は合計 4 回以内))	ぶどう(テラウ エア)[無核栽 培](施設栽 培) ぶどう(テラウ エア)[無核栽 培](露地栽 培)

注1) 使用回数の欄の記載は、収穫物への残留回避のため当該剤及びそれぞれの有効成分を含む農薬の総使用回数の制限を示す。

注2) 農薬登録上の作物名が標記の作物名と異なる場合、備考欄に記載した。

使用目的	対象果樹	使用薬剤	使用方法	使用上の留意点
無種子化	ぶどう (巨峰 (無核)、 ピオーネ (無核)、 シャイン マスカット (無核))	アグレプト液 剤 ストマイ液剤 20 (ストレプトマイシン 20.0%)	1. 満開予定日の14日前～開花始期に、 1,000倍液を散布する。 2. 使用回数は1回。 花(果)房へのジベレリン処理は必ず行う。 処理方法はジベレリンの項参照。	1. 花(果)房へのジベレリン処理との併用により無核化率が向上する。 2. 登録の範囲内において、処理時期が早いほど無核化の効果が高い。 3. 開花始期までの散布処理ができなかった場合は、第1回目ジベレリン処理液に加用して花穂浸漬処理を行う。濃度は1,000倍(200ppm)とする。 4. 目的樹以外へ飛散しないよう注意する。基本的に手散布とし、スピードスプレーヤでの散布は避ける。 5. 対象以外の品種については、処理効果等に差異があるため、使用に当たっては関係機関と協議する。
着粒安定 果粒肥大 促進	ぶどう (ナガノ パール)	ジベレリン粉末(ジベレリン 3.1%) または、 ジベレリン錠 剤(ジベレリン 4.55%)	1. 処理時期と濃度 第1回目処理： 満開時～満開3日 25ppm 第2回目処理： 満開10～15日後 25ppm 2. 処理方法はカップ による花(果)房浸 漬処理	1. 花穂の整形は開花前に行い、房先 3～3.5cmを残して、他の支柄と 副穂は切除する。先端は切り詰めない。 2. 樹の中で花穂によって開花時期 が揃わない場合は、2～3回に分 け満開となった花穂から処理す る。 3. 処理時期が早すぎると緑色小粒 果の着生が多くなる。 4. 2回目処理後にはサビ防止のため、 薬液を振るい落とす。加温ハ ウス等湿度の高い条件下では、1 回目処理後も薬液を振るい落と す。 5. 結実を安定させるため開花前に 摘心を行う。
無種子化 果粒肥大 促進 (ジベレ リン2回 処理)	ぶどう (ピオー ネ(無 核)、巨峰 (無核))	ジベレリン粉末(ジベレリン 3.1%) または、 ジベレリン錠 剤(ジベレリン 4.55%)	1. 処理時期と濃度 第1回目処理： 満開時～満開3日 後12.5～25ppm 第2回目処理： 満開10～15日後 25ppm 2. 処理方法はカップ による花(果)房浸 漬処理	1. 無核化を実施する樹の樹勢は強 めに維持する。 2. 結実不良が懸念される場合には、 摘心を実施する。 3. 花穂の整形は第1回目処理前(開 花前1週間から開花直前)に副穂 と支柄を上部から切除し房先の 約3～3.5cmを残す。なお、花穂 の先端が分かれている場合、先端 が軟弱で先細りしている場合は 先端を切除する。

使用目的	対象果樹	使用薬剤	使用方法	使用上の留意点
無種子化 果粒肥大 促進 (ジベレ リン2回 処理)	ぶどう (シャインマ スカット(無 核))		1. 処理時期と濃度 第1回目処理: 満開時～満開3日 後 25ppm 第2回目処理: 満開10～15日後 25ppm 2. 処理方法はカップ による花(果)房浸 漬処理	4. ジベレリン処理によって穂軸、果 柄が硬化し脱粒しやすくなるので 密着した円筒形の房形とする。 5. 処理が早すぎると穂軸が長くな ったり屈曲するので、処理適期を 厳守する。 6. 過密着になると果粒肥大が劣り 裂果も発生しやすくなるので、2 回目処理前に摘粒を行う。 7. 「ピオーネ」、「巨峰」は、結果過 多になると著しく着色が劣り樹 勢衰弱につながるため、着果基準 を厳守する。
無種子化 果粒肥大 促進 (ジベレ リン及び フルメッ ト混用1 回処理)	ぶどう (ピオー ネ(無 核))	ジベレリン粉 末(ジベレリン 3.1%) または、 ジベレリン錠 剤(ジベレリン 4.55%) フルメット液 剤 (ホルクロルフェニロン 0.10%)	1. 満開3～5日後(落 花期)に、フルメッ ト液剤10ppm加用 のジベレリン 25ppm液で花穂浸 漬処理を行う。 2. 無核化率向上のた め、満開予定日の 14日前～開花始期 にストレプトマイ シン液剤の1,000 倍液を散布する。	1. 処理時期はジベレリン2回処理 に比べて短い。満開3日後を基本 とし、5日後までには終わらせ る。処理が遅れた場合は、有核果 の混入、着粒不足、着色不良、果 粒肥大の不揃い等の恐れがある。 2. 果粒の初期肥大が旺盛なため、浸 漬処理が済み次第、早期から摘粒 を実施する。 3. 処理時期が遅いほど支柄及び果 柄の伸長が劣り、果粒が密着しや すい。このため摘粒の作業効率が 低下し、裂果の危険性も高まるた め早期の摘粒に努める。 4. 花穂の整形方法は2回処理に準 ずる。
果粒肥大 促進	ぶどう (巨峰 (有核))	ジベレリン粉 末(ジベレリン 3.1%) または、 ジベレリン錠 剤(ジベレリン 4.55%)	1. 満開15～20日後 に、ジベレリン 25ppm液で果房浸 漬処理を行う。	1. 有核果の結実数が20粒未満と見 込まれる場合に使用する。20粒以 上確保される場合は、適正果房重 (350～400g)よりも大きくなり、 着色不良、糖度低下を招くおそれ があるので使用しない。
着粒安定	ぶどう (巨峰 (無核)、 ピオー ネ(無 核)、 シャイン マスカ ット(無 核))	フルメット液剤 (ホルクロルフェニロン 0.10%)	1. ジベレリン第1回 目処理時にフルメ ット液剤2～5ppm を加用して花穂浸 漬処理をする。	1. 両品種とも第2回目のジベレリ ン処理はジベレリン単用とし、フ ルメット液剤は加用しない。 2. 果粒肥大が促進され着果過多と なり、着色不良・糖度低下が心配 される。摘粒・摘房作業を適期に 行うようにして適正着果量を遵 守する。

使用目的	対象果樹	使用薬剤	使用 方法	使用上 の 留意点
果粒肥大促進	ぶどう (巨峰 (有核))	フルメット液剤 (ホルクロルフェニロン 0.10%)	1.フルメット液剤5～10ppm液を満開15～20後日に、果房浸漬処理する。	1.フルメット液剤の使用により、果粒肥大が促進され、着果過多となり、熟期の遅れ、糖度低下、赤熟れ等が起こる場合がある。摘房、摘粒等による適正着果基準を遵守する。 2.衰弱樹に対しては使用しない。 3.処理時期が遅くなるため、高濃度で使用すると、果粉の溶脱を起こすことがある。また、処理時期が早いと無核果の混入が増加するので、使用時期、処理濃度を遵守する。
無種子化果粒肥大促進	ぶどう (デラウェア)	ジベレリン粉末(ジベレリン3.1%) または、 ジベレリン錠剤(ジベレリン4.55%)	1.第1回目処理は満開予定日14日前に濃度は100ppmで浸漬処理する。 2.第2回目処理はジベレリン処理した房の満開約10日後に、濃度は100ppmで浸漬処理する。但し、第2回目処理を機械散布で行う場合はジベレリン濃度75～100ppm、散布量10a当り80～100ℓの範囲とする。	1.発芽が揃い、しかも初期生育のよい樹に行うのが原則で、樹勢が弱めの場合には葉面散布用液肥の散布、又は芽かきを早めて勢力のよい新梢に揃える。 2.摘房は処理前に行う。 3.副穂は処理前に必ず除去する。処理しながら摘みとり、処理の目印にしてもよい。 4.第1回目処理適期を把握するためには、生育中庸な結果母枝の先端から2番目の新梢の第2花穂を観察する。花穂先端の1/3～1/4の花蕾がほぐれずに残り、透かして見るとかすかに隙間が見える時期が適期である。展葉数では10～11枚期である。  (以降は、2回目処理を機械で散布する場合の留意点) 5.散布器具は動噴あるいはミスト機を用いる。散布機のノズルは散布量が少なく、均一性が要求されるので、動噴は単口で口径0.5mm(ジベレリン専用ノズル)程度のものを用い、液圧を10kg/cm <sup>2</sup> 程度とする。 6.散布処理は果房中心にむらのないように行う。 7.散布処理は、浸漬処理に比べ果粒肥大がやや劣ることがあるので、健全な樹にのみ行う。 8.散布処理は液剤を多く必要とするので天候を見定めて行う。 9.他作物に付着しないように注意する。

使用目的	対象果樹	使用薬剤	使用方法	使用上の留意点
第1回ジベレリン処理時期の早期への拡大	ぶどう (デラウェア)	ビーエー液剤 (ベンジルアミノプロリン 3.0%) または、 プレリユード液剤 (ベンジルアミノプロリン 3.0%)	1.ビーエー液剤の濃度は100ppm(300倍)とし、ジベレリンの前処理(第1回)液に添加する。 2.ビーエー液剤を添加した場合のジベレリン前処理時期は、満開予定日の14~17日前(展葉数9~9.5枚)とする。	1.果粒が密着すると裂果が助長されるので、密着房は裂果防止対策(摘粒や袋掛けなど)を行う。また、例年着粒がよい樹には使用しない。 2.処理時期が遅れると果粒肥大や房長が抑制されるので通常処理適期の満開前14日以降は添加しない。 3.花振り傾向の樹は通常処理適期に近づけて行う。 4.収量が多くなるので結果過多にならないように結果調節を行う。 5.樹勢が衰弱していると十分効果があがらないので処理を避ける。
果粒肥大促進	ぶどう (デラウェア)	フルメット液剤 (ホルクロルフエニロン 0.10%)	1.ジベレリン第2回目処理(満開10日後)液にフルメット液剤を3~5ppmになるように加用浸漬処理する。	1.フルメット液剤使用により果粒肥大が促進され、着果過多となり、裂果、着色の遅れ及び糖度低下等が起こる場合がある。摘房、摘粒等による適正着果基準を遵守する。 2.果粒の溶脱を起こす場合があるので、処理時期、濃度を遵守する。
着粒増加	ぶどう (巨峰、安芸クイーン)	フラスター液剤 (メピコートクロット 44.0%)	1.「巨峰」は、展葉7~8枚時に花穂、新梢全体にかかるように、500倍液を10a当り100~150ℓ、又は露地の場合に限りスピードスプレーヤーで1,000倍液を300ℓ散布する。 2.「安芸クイーン」は、展葉7~9枚時に500倍液を10a当り150ℓ散布する。 3.使用回数は1回。	1.樹勢が旺盛な場合、効果がやや劣ることがあるので、栽培管理は、好適樹相の維持に努める。 2.「安芸クイーン」の場合、花穂整形は花穂長6~7cmを目安に行う。 3.他品種(欧州系品種など)に付着すると薬害発生の危険があるので、飛散ないように散布する。 4.他作物に飛散ないように散布する。 5.他の薬剤との混用散布はしない。ただし降雨の予想される時は、アプローチBI(1~5ml/ℓ)を加用してもよい。
新梢伸長抑制 (短梢せん定樹)	ぶどう (ピオーネ(無核))	フラスター液剤 (メピコートクロット 44.0%)	1.展葉8~10枚時に、500倍液を10a当り150ℓ散布する。 2.使用回数は1回。	1.短梢せん定栽培における、強樹勢樹への使用とする。強樹勢樹とは、平均的な新梢の長さが、展葉8枚期で65cm以上、9枚期で80cm以上の樹とする。 2.強樹勢樹以外への使用は樹勢低下やこれに伴う品質低下を招く恐れがある。 3.使用により無核果の着粒数が増加する。 4.花穂整形は慣行方法と同様に行う。 5.単用散布とし、目的樹以外に飛散しないよう注意する。

使用目的	対象果樹	使用薬剤	使用 方法	使用上の留意点
新梢伸長抑制 (短梢せんだん樹)	ぶどう (ナガノパープル)	フラスター液剤(メピコトクロト' 44.0%)	1.満開 10～14 日後に、500 倍液を 10a あたり 1500 散布する。 2.使用回数は1回。	1.満開 20 日後の散布では、樹勢などの条件によっては十分な効果が得られない場合がある。 2.果粒肥大が促進される場合があるため、樹勢などをよく観察して使用する。 3.弱樹勢樹では衰弱を招く恐れがあるため、使用しない。
落葉促進	ぶどう (施設栽培)	エスレル 1 0 (エテホン 10.0%)	1.収穫後～せん定前に 500～1,000 倍液を 10a 当り 150～250l、樹全体に散布する。 2.使用回数は1回。	1.散布から葉の黄化まで5日以上、落葉開始まで 10 日以上かかるため、せん定又は発芽促進剤散布予定の 10～14 日前に散布する。 2.アルカリ性薬剤と7日～10 日前後の近接散布はしない。 3.展着剤は加用しない。
発芽促進及び発芽率向上	ぶどう (施設栽培)	CX-10 (シアナミド 10.0%)	1.10～20 倍液を結果母枝に散布又は塗布する。 2.使用時期:収穫後発芽前 3.使用回数は1回。	1.樹体の栄養状態、処理時期により発芽促進効果の変動するので、栽培管理は適切に行う。 2.栽培中の他作物にかかると薬害を生じるので、まわりに飛散しないよう注意する。 3.散布者は、使用前後の 24 時間は飲酒をしない。 4.登録上は露地栽培での使用も可能であるが、発芽時期が早まり晩霜害に遭う危険性が高まるため注意する。

(4) もも

薬剤名	使用目的	使用方法	使用時期	本剤の使用回数 (有効成分を含む剤の総使用回数)	備考
バウンティフロアブル	新梢伸長抑制	茎葉散布	満開後3～12週間 (但し、収穫14日前まで)	4回以内(パクロブトラゾール4回以内)	

注1) 使用回数の欄の記載は、収穫物への残留回避のため当該剤及びそれぞれの有効成分を含む農薬の総使用回数の制限を示す。

使用目的	対象果樹	使用薬剤	使用方法	使用上の留意点
過繁茂樹の新梢伸長抑制	もも	バウンティフロアブル (パクロブトラゾール 21.5%)	<ol style="list-style-type: none"> <li>満開後3週間から2～3回 1,000～2,000倍液を 10a当り 200～300ℓ 茎葉に散布する。ただし、散布は収穫 14 日前までとする。</li> <li>主幹形樹等で樹冠拡大が完成し、新梢の伸長が旺盛な樹勢の強い樹で使用する。</li> <li>薬剤の散布間隔は3週間以上あける。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>薬剤投入量が多くなるほど新梢の伸長抑制効果が高まる。新梢の生育状況を観察しながら、濃度や散布回数を決定し、多量散布は避ける。</li> <li>園内及び周辺の他の作物にかからないように使用する。</li> <li>残効性が長い薬剤であり、処理翌年には生育抑制が強く現れる場合がある。連年使用する時は処理時期を遅らせ、残効の程度を見極めた上で処理の可否や処理量等を決める。</li> <li>土壌への残留性が強いので、土壌処理は実施しない。また、規定の水量(10 a 当り 200～300ℓ)で散布し、地面への薬液の飛散を極力少なくするとともに、薬液が余らないように薬剤を調合する。</li> <li>樹冠の拡大途中の若木や樹勢の弱い樹に対しては生育抑制効果が強すぎるため使用しない。特に若木や老木の混在した園地での処理には注意する。</li> <li>徒長枝の発生は少なくなるが、節間が詰まって葉が密生状態になるので、葉摘み等の着色管理を徹底する。</li> <li>展着剤を加用する。</li> </ol>

## (5) おうとう

薬剤名	使用目的	使用方法	使用時期	本剤の使用回数 (有効成分を含む剤の総使用回数)	備考
バウンティフロアブル	新梢伸長抑制	茎葉散布	収穫後(8月下旬まで)	2回以内(ハクロフトラゾール2回以内)	
	新梢伸長抑制	茎葉散布	満開後3~6週間(但し、収穫14日前まで)		

注1) 使用回数の欄の記載は、収穫物への残留回避のため当該剤及びそれぞれの有効成分を含む農薬の総使用回数の制限を示す。

使用目的	対象果樹	使用薬剤	使用方法	使用上の留意点
過繁茂樹の新梢伸長抑制	おうとう	バウンティフロアブル(ハクロフトラゾール 21.5%)	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 目標の樹冠占有面積に達し、樹勢の強い樹(目通りの側枝先端新梢長が40cm以上)で使用する。</li> <li>2. 収穫前処理は、満開後3週間頃に1,000倍液を1回、又は満開後3週間頃から2,000倍液を1~2回茎葉に散布する。ただし2,000倍液の2回目散布は、散布間隔を2~3週間あけ、収穫前14日までとする。</li> <li>3. 収穫後処理は、収穫後8月下旬までに1,000倍液を1回茎葉に散布する。</li> <li>4. 年に収穫前処理か収穫後処理のいずれか一方の処理とする。</li> <li>5. 使用薬液量は、いずれの処理についても10a当り200~300ℓとする。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 薬剤投入量が多くなるほど新梢の伸長抑制効果が高まる。新梢の生育状況を観察しながら、濃度や散布回数を決定し、多量散布は避ける。</li> <li>2. 園内及び周辺の他の作物にかからないように使用する。</li> <li>3. 残効性が長い薬剤であり、処理翌年には生育抑制が強く現れる場合がある。連年使用する時は処理時期を遅らせ、残効の程度を見極めた上で処理の可否や処理量等を決める。おうとうでの連年使用は、処理翌年の生育をよく観察し効果が不十分と判断される場合のみとし、その場合は収穫後処理により追加散布する。</li> <li>4. 土壌への残留性が強いので、土壌処理は実施しない。また、規定の水量(10a当り200~300ℓ)で散布し、地面への薬液の飛散を極力少なくするとともに、薬液が余らないように薬剤を調合する。</li> <li>5. 樹冠の拡大途中の若木や樹勢の弱い樹に対しては生育抑制効果が強すぎるため使用しない。特に若木や老木の混在した園地での処理には注意する。</li> <li>6. 徒長枝の発生は少なくなるが、節間が詰まって葉が密生状態になるので、葉摘み等の着色管理を徹底する。</li> <li>7. 展着剤を加用する。</li> </ol>